

○山田明央・中村好徳・林 義朗
(九州沖縄農研)

【目的】

九州低標高地域における周年放牧技術確立のための基盤技術として、既存の暖地型放牧シバ草地へ耕起することなくイタリアンライグラスを播種導入（オーバーシーディング）し、高栄養な冬季放牧用草地を原植生である暖地型放牧シバ草地を痛めることなく造成する技術を開発する。

今回は、イタリアンライグラス発芽・定着率の簡易な向上法として播種後堆肥散布を行った結果について報告する。

【方法】

堆肥散布造成法

暖地型芝型草種優占草地（バヒアグラス、センチピードグラス、シバ混成草地）に10月3日にナガハヒカリ並びにヒタチヒカリを5kg/10a播種した。供試面積は1区1aとしナガハヒカリ、ヒタチヒカリそれぞれに堆肥散布量1t/10a、2t/10a、3t/10aの3区を設定した。

現存量は12月、2月は2ヶ月おきに、以降5月まで1ヶ月おきに各区全量刈り取りによって測定した。

追肥は12月4日、5月11日にN:P₂O₅:K₂O各区5kg/10aを施用した。

【結果および考察】

(1) 12月の刈り取り調査時点では、イタリアンライグラスの被度は3t区。>1t区>2t区であった(表1)。

(2) 3月までの積算乾物収量及び日乾物生産量はヒタチヒカリがナガハヒカリを上回る傾向を示していた。(図1、2)

表1 イタリアンライグラスの被度(%)

品 種	1 t 区	2t 区	3t 区
ナガハヒカリ	30	25	60
ヒタチヒカリ	40	35	65

(3) 3月、4月とヒタチヒカリの日乾物生産量が頭打ちになる傾向が見られるのに対して、ナガハヒカリの日乾物生産量は増加傾向を示し、初冬から春にかけての積算乾物収量は品種並びに堆肥施用量間でほぼ差が無くなった(図1、2)。

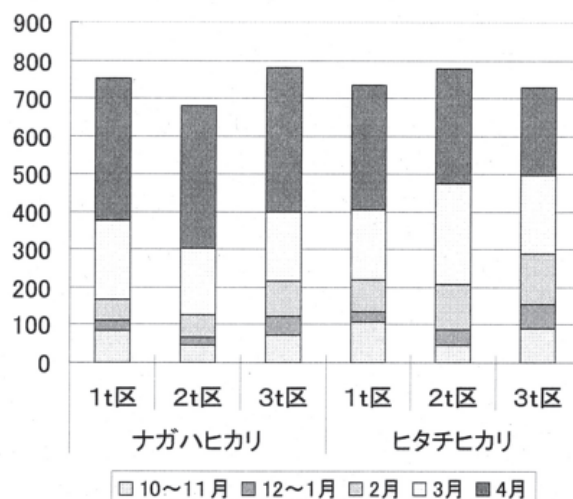


図1. 各月の乾物収量

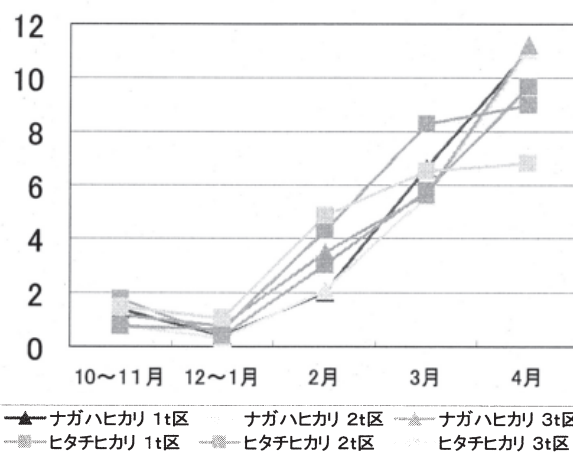


図2. 日乾物生産量の変化

(4) 以上より、播種後堆肥散布法で暖地型芝草地にWOS造成したイタリアンライグラスは2月までの冬季間に限定すれば堆肥3t施用したヒタチヒカリ区が約300kg/10aと冬期備蓄草量としては実用的な水準に達した。また、何れの区も春季利用までを考えるとWOS造成草地としては高水準の草量を実現していると考えられた。